

学長室から

竹屋 元裕

視覚のマジック～白内障手術～

この10年来、熊大眼科で高眼圧と白内障のフォローを受けている。どちらも治療は不要で経過観察で過ごしてきたが、古希を迎え、いよいよ白内障が進行してきた。夕暮れ時に余計に暗さを感じ、対向車のライトがぎらぎらと眩しくなった。そこで、先月下旬に井上俊洋教授の執刀で、まず左眼の手術を受けることにした。

この手術は、水晶体の前嚢を切開し、混濁した水晶体の内容物を取り除き、人工眼内レンズを挿入するという、正味20分弱の手術である。局所麻酔で行われるので術者との会話が可能で、手術の経過も“見える”。手術台に横になり、点眼麻酔が終わるといよいよ執刀開始である。一瞬、視界が真っ白となりホワイトアウト状態になったかと思うと、3つの白い北極星の様な光（恐らく照明灯）が現れ、やがて3つの北極星は融合して白いオーロラとなり、波打ったり渦巻いたり、ゴッホの「星月夜」の様な不思議な光景であった。そして無事、手術が終わり、瞼が閉じられ眼帯が付けられた。

白内障手術は日帰りが主流だが、熊大病院では3日間の入院が必要。1日目に入念な検査、2日目に手術、翌日朝に眼帯がはずれ、退院となる。眼帯がはずれた瞬間は感動的であった。すべてのものがくっきりと見え、しかも空の青、木々の緑、花びらの赤が鮮やかに見える。20代に見えていた世界が蘇った気がして、気持ちも若返った。いよいよ退院の時間となったが、その時にお世話をしてくれた看護師さんは、何とこの3月に卒業したばかりの本学卒業生であった。初々しさにほっこり！ 頑張っ

欲しい。



手術前（写真上）と手術後（同下）の見え方の違い。鮮やかな世界が蘇り、若返った気分になりました＝Photoshopによるシミュレーション

阿蘇シンポジウム ポスターセッション

志多田研究員（生物・抗毒素共同研究講座）に優秀賞

熊本県内の破傷風菌 分布調査とゲノム解析

化血研が主催する第43回阿蘇シンポジウムが7月28（金）、29日（土）に熊本城ホール（シビックホール）で開催され、本学の生物毒素・抗毒素共同研究講座に所属する志多田千恵研究員がポスターセッションで優秀賞を受賞しました。

受賞演題は「熊本県内の破傷風菌分布調査とゲノム解析」です。県内の任意の場所から土壌を採取して、破傷風菌の分離を行いました。分離した多数（151株）の菌は細菌学的、免疫学的、遺伝学的な試験と解析をした結果、毒素産生能の違いや遺伝子の多様性を明らかにしました。

志多田研究員は「身近な生活環境に感染リスクがあることを科学的に証明できたのは、緻密な試験計画による結果であり、県内だけでなく国内の破傷風菌の分布も差はないと考えます」と話していました。（入試・広報課）



ポスターの前で賞状を手にする志多田研究員

岡 順子 教授
(看護学科)



図書館主催の「第62回私の部屋でランチを」が7月25日(火)、キャンパステラスであり、今年4月に着任した看護学科の岡順子教授が「今までのわたし、これからの私」と題して話しました。

岡教授は1985年に保健婦(当時)として熊本県庁に入庁して以来、今年3月に健康づくり推進課長として定年を迎えるまで、一貫して県の保健医療行政に携わってきました。講話では、働く女性として直面した「20~30代の壁(出産、育児)」、「30~40代の壁(仕事・キャリアアップと家庭)」という二つの壁に言及。「常に笑顔を」と自身に課しながら第1の壁を乗り越え、第2の壁も「仕事を家庭に持ち込まず、家庭内のコミュニケーションを絶やさない努力」によって克服した経験を披露しました。

一方で、女性専門職の視点を重視した潮谷義子前知事との出会いが、岡教授を徹底した現場主義に向かわせたと言います。講話でも、自身が中心となって天草圏域から始め、いまや全国的にも高い評価を得ている「熊本型早産予防対策事業」の取り組みを紹介。「今後ますます社会の変化に応じた保健医療システムが求められている。これまでの経験を生かし、柔軟な発想と機動力で研究、教育に取り組んでいきたい」と抱負を語っていました。(NL編集部)

看護師のアセスメント能力向上を目指す

認定看護師課程が初の研修会

認定看護師教育課程では、臨床の現場で活躍する看護師のアセスメント能力の向上を目的としてオンラインによる研修会を企画しました。初開催となる今年度は、6~7月にかけて全5回の研修会を実施し、桜十字病院の看護師5人が受講しました。

研修会では、ペーパーペイシェントで看護過程を再学習した後、受講者が実際に担当している患者について、専任教員の飯山(老人看護専門看護師)と内村(認知症看護認定看護師)と一緒に看護目標・計画を立案し、計画に基づいた看護実践と評価までのプロセスをたどりました。うち1回は、桜十字病院で対面による看護計画の発表とディスカッションを行いました。

終了後、受講者からは「看護過程の展開からアセスメント・実施までを共有することによって認知症看護だけでなく、看護師としてのかかわり方も学ぶことができた」との声が寄せられ

ました。このような、患者への看護過程をメインにした研修会の企画は他にない新しい取り組みであるため、来年度以降も、より多くの病院と連携し、活動を継続していきたいと考えています。

(キャリア教育研修センター・内村香代子)



桜十字病院であった対面での研修会で、看護計画を発表する看護師

銀杏アラカルト



生徒からの質問に答える藤村さん(奥)

■都城西高生徒が来学 宮崎県立都城西高校の生徒12人が7月25日(火)に本学を訪れ、模擬授業を受講したり、学内施設を見学したりしました。生徒たちは、入試・広報課職員による本学の概要説明を受けた後、リハビリテーション学科言語聴覚学専攻の永友真紀講師の模擬授業を受講。その後、1号館の実習室や図書館、レストランなどを見学しました。学生気分を味わうためレストランで昼食も体験。最後に、同校卒業生で医学検査学科1年の藤村利捺さんから大学生活について話がありました。質疑応答では生徒全員から質問があり、「化学や生物の学習方法は」や「学習している時間帯は」といった質問に交じて「よく遊ぶところはどこですか」などといった問いもあり、藤村さんは丁寧に回答していました。(入試・広報課)

B2ヴォルターズ選手が身体能力測定

バスケットボールBリーグ2部（B2）熊本ヴォルターズの選手たちを対象にした身体能力等の測定会を25日（火）、本学アリーナで行いました。本村亮輔選手、磯野寛晃選手など選手9人が参加。本田啓太講師を中心に教員、理学療法士、学生の計20人が計測にあたりました。

選手たちは身体測定を終えた後、俊敏性を見るアジリティテストをはじめ、スピード、持久力の各テスト、動作解析など、精密な計測機器を使った計6種類の測定に臨みました。このうち、アジリティテストでは、大きな体を左右に機敏に動かし、学生たちを驚かせていました。また、バイオデックスという機器を使った膝関節の屈曲や伸展筋の力を見るテストでは、重い負荷を受けながら必死に膝を曲げ伸ばししていました。

チームは10月7日（土）、熊本県立総合体育館でB2開幕戦に臨みます。今後はリーグ開幕直前の9月、シーズン中盤の来年1月にも選手の身体機能・体力測定や分析を行います。

鶴屋女子バスケットボール部、オムロン女子ハンドボールの測定会にも参加した理学療法専攻4年の横山楓海さんは「競技ごとに動きや筋肉のつき方などの違いを目の当たりにでき、貴重な経験でした」と話していました。（入試・広報課）



写真は、30歳以上の挑む石橋侑磨選手。同下は、バイオデックスと呼ばれる機器を使って筋力測定するテレンス・ウッドベリー選手

いざ臨地実習へ…助産別科生に「適格認定書」

臨地実習に臨む助産別科の学生に対する「臨地実習適格認定書」の授与式が7月28日（金）、1502M講義室であり、21人が認定書を手にしました。

同認定書は、「助産学実習Ⅱ」の要件を満たし臨地実習が認められた学生に与えられるものです。授与式は、学生たちが前期の学修成果を基に実習現場でも「母子とその家族に対する安全で安楽な助産活動」を展開するという決意表明の場でもあります。

授与式では、原田なをみ助産別科長の開式の言葉の後、竹屋元裕学長が一人一人に認定書を手渡し「これまでの知識を総動員して、一人前の助産師になるために、研鑽を積んでほしい」と激励しました。引き続き、学生たちが事前に収録した学生誓詞がプロジェクターで写し出され、会場が学

生たちの力強い言葉に包まれました。

学生たちは8月21日（月）から、臨地実習に入ります。（入試・広報課）



授与式後、竹屋学長らと記念撮影する助産別科の学生たち

インフォメーション

週間行事予定（8月5日～8月25日）	
8 / 6（日）	第2回からだのふしぎ探検 in 熊本保健科学大学
8 / 18（金）	情報セキュリティ研修会（1300L講義室）
8 / 20（日）	8月期オープンキャンパス

※次回（206号）は8月25日配信予定です。